

# しましまの樹



るい

## 沙弥の変化

---

それから沙弥は、『しましまの樹』のことばかり話した。

「あの樹がまた見えないかな...、他にも見た人いたりして」

と言って窓の外を見ていることが多くなった。

いつか彼女が、『しましまの樹』を探しに出掛けてしまうんじゃないか。僕は、そればかり心配した。

ファイルの内容が真実だと考えるのは馬鹿げていたけれど、沙弥のそわそわした様子は日に日に増していたし、僕が帰ると決まって窓辺に座っていた。

そんな日が、二週間ほど続二週間ほど続くと、おしゃべりだった彼女は次第に笑顔を見せなくなり、ぼうっとしている事が増えた。

夜、一緒に買い物した帰り道、やっぱり海の方を見ている沙弥に、「あれから、また見えた？」と聞くと、「ううん...」と、少し上の空な様子で答えるだけだった。

僕は沙弥を元気づけようと、映画に誘ったり、友達と遊びに行くように言ってみたりした。

けれど、帰ってくる言葉は

「うーん...、いい」

だった。

そのうち『しましまの樹』のことさえ口に出さなくなり、食欲も無くなっている様子の沙弥を見ると、ますますファイルの内容が頭の中をちらついた。

”人々はこの樹を求めて争いを起こしたため...”

”『しましまの樹』はまたの名を『死神の樹』ともいう。”

”この樹の魅力に取り付かれ、樹を追って姿を消す...”

考えたくない。

でも、沙弥はあの日からすっかり変わってしまった。

## それぞれの樹

---

ひと月ほどたった頃。

あまりにも憔悴した様子の沙弥を見てられなくて、ぼんやりと窓の外を見ている彼女に寄り添って聞いてみた。

「沙弥、もしもう一度あの樹を見つけたら、どうする？」

沙弥は、力なく開いていた目を、ゆっくり僕のほうに向けた。

「え...」

「『しましまの樹』を見つけたら、どうする？もし、あの樹の前に行けるとしたら、どうしたい？葉っぱをとって、空を飛ぶ？」

沙弥は僕の目を見つめて、信じられないというように呟いた。

「わかんない。そんなこと、何も考えてなかった...」

僕は急に胸が苦しくなった。

そんなこと聞きたくなかったのに、沙弥の元気な顔が見たくて聞いてみた。

それなのに、『しましまの樹』という言葉で僕のほうを見る彼女が、そこにいるという事が耐えられなかった。

「考えてなかったのに...、なぜそんなにあの樹の事を思いつめてるの？あの樹を、また見たいんだろ？」

少しきつい言い方になってしまった。

沙弥はすっとうつむき、黙った。

どうすることも出来ない自分にも、あの樹を忘れる事が出来ない沙弥にも、腹が立った。

偶然にもあの樹をもう一度見て、それで喜ぶなら、それで全部解決するなら。

また前の沙弥に戻って、普通に暮らしていけるなら、僕は『しましまの樹』を一緒に探すだろう。

毎日、毎日窓の外を見て、彼女と一緒に、もう一度だけあの樹を見る楽しみを待ち続けるだろう。

けれども彼女は、そんな事を望んでいるのだろうか。

もう一度『しましまの樹』を見つけたら、彼女は今度こそいなくなってしまうんじゃないか。

そう思うほど、沙弥はあの樹の事で力を失っていた。

## 苛立ち

---

「泉希は、見てみたくないの...？」

沙弥は小さな声で、ぽつんと言った。

「見たいわけないだろう！ どうして見たいんだよ！？」

僕はカッとなって答えた。さっきの言葉を後悔したのに、沙弥の気持ちを知るほどやり場のない怒りを抑えられなくなった。

こんな事になるなんて、あの夜まで考えてもみななかったんだ。

僕と沙弥は、何もなくても笑い合えたし、どんなことがあっても離れることなんてないと思っていた。それなのに今は、彼女を思いやる言葉すら思いつかない。

これ以上この話をすると、僕は『しましまの樹』がまた現れる前に、沙弥のことを傷つけ突き放してしまう。

少し頭を冷やそうと立ち上がった。散歩でもしてこようと薄手のパーカーを羽織ると、

「すぐ帰るから」

と声をかけて、外に出た。

## 出会いのきっかけ

---

辺りは陽も落ちて、薄暗かった。

空には星がちらばって、細い月が浮かんでいる。

僕は、沙弥と出逢った3年前のことを思い出した。

彼女はまだ大学生で、僕はいまの職場に勤め始めて間もない頃だった。

突然の夕立で、傘を持ってなかった僕が、飛び込んだ屋根付き駐車場。その家の一人娘が沙弥だった。

「あの、傘使ってください」と後ろから声をかけられて、ビックリした僕の顔を見てくすっと笑ったのに見とれて、思わず傘を受け取ってしまった。その後、傘を返しに行ったとき、彼女が手紙をくれた。

“突然の雨で困ったときは、また来てください”

そう書いてあった。

雨の日にそこを通りかかると彼女のことを考えたけれど、家を訪ねる勇気はなかった。

しばらくして、近くの酒屋でバッタリ会ったとき、僕はあの雨の日の事を鮮明に思い出した。

近づくと、彼女は小さく会釈した。

「お酒、飲めるんですか？」

今度は僕のほうから声をかけた。

彼女は、見た目が幼く未成年じゃないかと思うほどだったから、その意味もあったけど。

「あ、はい。父と一緒に飲むんです」

そうなのか...。と思いつつ、傘のお礼を言うと、「また困ったときは」と笑いながら、連絡先を教えてくれた。

## 記憶の中の彼女

---

それから何度か連絡したり、会うようになった。いった。

沙弥は、どちらかというとな大人しい子だったけど、笑いだすと止まらなくなったり、妙なことにこだわったりした。

それらも全部、僕にとって新鮮で、彼女の魅力の元になっている事が、僕にはよくわかっていた。

沙弥が僕の部屋にずっと居るようになったのは、去年の冬からだだった。

彼女の父親が転勤で遠くの街へ行くことになり、母親も弟の受験で神経質になったと言っていた頃。

彼女はごく自然に、帰らなくなった。

それでも、週に1~2回は戻るし、母親も僕とは何度か会っていたことから、特に何も言わなくなっていたようだ。

僕も、沙弥が居るのが当たり前になっていき、まるでずっと前からそうしていたような気さえするほどだった。

僕は、彼女が部屋のカーテンを「白がいい！」と言い出して、別に何でもいいと言う僕のかけていたグレーのカーテンを、とうとう白に変えてしまったのを思い出して吹きだした。海の見える部屋にグレーのカーテンは似合わないと言ってきかなかったのだ。

あの時は、そんなことどうでもいいと思っていた。

でも、彼女が満面の笑顔で抱えてきた白いカーテンを窓につけるのを手伝っていると、その空間はみるみる変わっていくように思えた。

一生懸命腕を伸ばして、レールに真剣に白いレースカーテンをつけている彼女は、普段の幼い様子とは違う、僕を守る女神のように美しくみえた。

白いカーテンのレース地を通して入る陽射しは思っていた以上に部屋を明るくしたし、潮風に揺れるカーテンに、「ほら！いいでしょ？こっちの方が絶対いいよー」と、カーテンの前や部屋の隅から眺めて、嬉しそうにくるくる飛び跳ねる沙弥は天使のように可愛らしかった。

## いま彼女は...

---

あの白いカーテンの前で、沙弥は今、悲しげにうつむいてる。

あの窓辺で、彼女は僕の帰りを待ちながら、『しましまの樹』のことをどう考えているんだろう。

あの樹のことを忘れられない彼女は、それを見つけてどうしたいかは考えてなかった、と言った。

僕は思わずカッとなってしまったけど、彼女は本当はあの樹のことをどんなふうに考えていたんだろう。よく聞いてあげる事も出来ないまま、出てきてしまった。

そうだ、とにかく彼女の気持ちを聞いてみよう。

それからでも遅くはない。

沙弥はこのひと月、ずっと元気がない。あんな状態の彼女を1人にするなんて、僕はなんて馬鹿なんだ。

こうしている間に、彼女が部屋を出て行って二度と戻らなかつたら、後悔してもしきれない。早く部屋へ戻ろう。

何も考えずにただ彼女の話聞いて、傍にいよう。

今僕に出来ることは、そんな事しかない。でもそれは、僕にしか出来ない事なんだ。

僕は、帰り道を急いだ。

すっかり暗くなった道に、街灯がぼつりぼつりと灯りを浮かべている。

途中から小走りになる。

もし、もう沙弥が居なかつたら、たとえ『しましまの樹』がどうであろうと、彼女が僕の部屋に戻らなかつたら...

こんなすれ違いから、彼女と別れる事になってしまったら...!!

小走りはスピードを上げ、最後には全力疾走になった。

玄関のドアの前で呼吸を整える。汗が頬をすべり落ちる。

どうか、窓辺の前で待っててくれますように。

このドアの向こうに、沙弥のクツがありますように。

僕は祈るような気持ちで、ノブに手をかけゆっくりと回した。

## 開かれた窓

---

ドアを開くと、そこには沙弥のクツがいつも通りあった。

よかった…。

僕は汗を拭いながら靴を脱いで中に入った。

ワンルームの細い廊下を歩いて奥に進むと、部屋のほうでガタッと物音がした。

窓辺を見る。大きな窓は開いていて、白いレースカーテンが風に揺れている。

沙弥は居なかった。

「沙弥…」

僕は部屋を見渡した。ベッドの下も見た。

沙弥が居ない。けれど、たった今、何かが落ちるような物音がした。

僕は窓に近づき、外をのぞいた。

もしかすると沙弥は落ちてしまったのか。ここは二階だ。

僕は真っ暗な外の空気を吸い込みながら下を見た。

すると後ろから、

「泉希」

と呼ばれた。

振り返ると、部屋に入口に沙弥が立っていた。

「沙弥、いたんだ」

僕は沙弥が窓の外に落ちてなかったことにホッとした。

ところが沙弥は、急にくるっと回れ右をして、簾の向こうの廊下を戻っていく。

「沙弥、待って！」

声をかけて追いかけてようと踏み出すと、沙弥のあわてた声が返ってきた。

「トイレ流し忘れた～!!」

僕は伸ばしかけた手の行き場をなくして、

「あ…、ほんと？」

首の後ろをポリポリとかいてみた。



それでも沙弥は、少し気まずそうな顔で部屋に戻ってきた。

僕は、沙弥の腕を引っぱって抱き寄せた。

「さっきは、ごめん。沙弥がああ樹を追いかけて、いなくなってしまうような気がして...、心配なんだ」

沙弥は、僕の背に回した手でギュッと服をつかんだ。

「泉希、私ああ樹を探したい...。そんな事出来ないって分かってるけど、どうしてももう一度見てみたい。なんでそう思うのか、自分でも分からないけど...」

僕は、絶望感が胸いっぱい広がるのを、ただじっと耐えた。

「うん」

それしか答えられなかった。

沙弥はこれからどうなるんだろう。そればかりが、頭の中を回っていた。

その時、沙弥がふと頭を上げ、僕から身体を離して窓のほうを見た。

そして、窓にかけ寄った彼女が、「あ！」と小さく声をあげて僕のほうを振り返った。

「泉希...、来て!!」

その様子に、僕も急いで窓辺に行く。

「見て！ほら、あっち。港のところに、見える!？」

僕は、夜の闇の中、彼女の指差す方向に目を凝らした。

3キロほど向こうにある港の堤防に、キラキラと不思議な色に輝くものが見えた。その光に照らされて、下に伸びる縞模様の柱のようなものが...

もしかして、あれが...!!

「しましまの...、樹？」

僕がつぶやくと、沙弥がうなずく。

「呼ばれてるような気がしたの。泉希にも、見えるんだね」

## 走り出す

---

脈打つように金色の光を巻きながら、不思議な色を放つ『しましまの樹』を見ていると、切なさとも嬉しさともつかない、例えようのない胸の苦しさを感じた。

心がすい寄せられるような、何をおいても行かなければいけないような、居ても立ってもいられない落ち着かない気 持ちだった。

何か、今この瞬間のために全てのことがあったと思うほど、あらゆる時間と感情がぎゅうっと詰まった空間がそこにあった。

沙弥が、樹を見つめながら僕の胸にもたれかかる。

「泉希の心臓の音と同じだよ、あの葉っぱの光り方」

僕も、自分の鼓動が沙弥の頬を押し返すのを見て、そう思っていた。「沙弥、あの樹のところに行ってみようか？」

僕は、自分の出した声に驚いた。と同時に、その気持ちを抑えられない自分がいることも分かっていた。

「え？」

沙弥は僕が本気なのか、戸惑っている様子だった。

「だって、あんなに近くにあるじゃないか。僕にも見えてるし、もう二度と見れないかもしれないんだ。沙弥、あの葉を取りに行こう!!」

彼女は、僕の目をじっと見つめて、コクッとうなずいた。

「うん！」

そうして僕らは、急いで外に出る準備をして、鍵を持ちにクツをはいた。

玄関のドアを閉め、ドアに鍵をかけようとする僕の手を沙弥がそっと押さえた。

「泉希、お腹すいてない？」

すぐにでも走り出したい僕に、真剣な目でそれを聞く彼女に緊張がほどけた。

僕は鍵穴を回し彼女を引っ張ってキスすると、その手をつかんだまま港のほうへ走り出した。